

ハトムギにおけるメイチュウ類の発消生長

藤吉 臨・山中正博 (福岡県農業総合試験場)

Nozomu FUJIYOSHI and Masahiro YAMANAKA : Seasonal prevalences of some species of borer on job's tears, *Coix lachryma-jobi* var. *frumentacea* MAKINO

転換作物として導入されたハトムギには病害虫の発生が多い。なかでもメイチュウ類の発生は多く、有効な防除法がないため栽培上大きな障害となっている。そこで、メイチュウ類防除法の確立を図るため、1982および1983年にハトムギを加害するメイチュウ類と被害の発消生長について調査した。

1. 方法

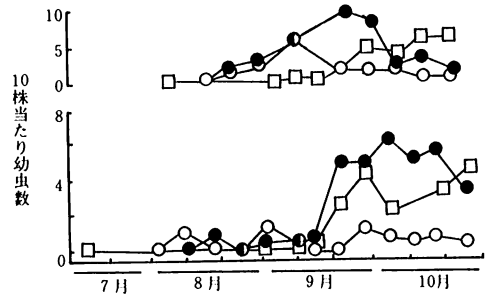
1982および1983年とも筑紫野市阿志岐の水田転換畑で、移植栽培のハトムギ約4 aの圃場を用いた。移植日は1982年が6月22日、1983年が6月24日であった。他の栽培管理は福岡県栽培技術指針(福岡県農政部, 1982)に準じて行った。

調査は両年とも原則として週1回行った。調査株は系統任意抽出しその数は、1982年には8月4日から収穫まで100株、1983年には7月14日から9月14日まで100株、9月23日から収穫まで50株とした。抽出株はすべて切り取り、全茎を分解し、寄生虫の種類、令期別虫数および被害茎数などについて記録した。

2. 結果および考察

ハトムギに食入加害していたメイチュウはイネヨトウ、アワノメイガおよび極く少数のスジツガであった。イネヨトウおよびアワノメイガ幼虫の発消生長を第1および第2図に示した。

イネヨトウは若令(1・2令)のピークが7月下旬、9月上~中旬および10月中旬にあり、ハトムギでは3回



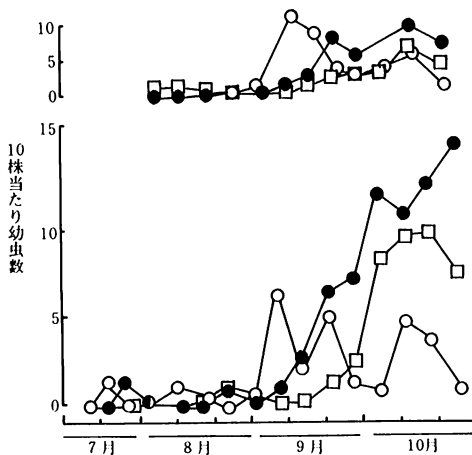
第2図 アワノメイガ幼虫の発消生長 (上: 1982, 下: 1983, 記号は第1図参照)

の発生であった。それらは第2, 3および4世代の幼虫であると考えられる。7月下旬はハトムギが小さいため第2世代幼虫の加害で株絶えになることもあるが、発生量が少ないため大きな被害とはならない。第3世代幼虫の発生は量的に最も多く、9月中旬以降の中、老令幼虫による被害が著しい。第4世代は収穫期に近く、しかも第3世代幼虫の被害と重なるため、この世代単独の被害は明らかでなかった。

アワノメイガは若令のピークが8月上旬および8月下旬~9月上旬に認められたが、あまり明瞭でなく、発生回数の推定はできなかった。しかし、9月中旬以降の中・老令幼虫の発生量は多く、この世代が最も被害をもたらすことが明らかとなった。

両種の発生量は2カ年ともイネヨトウが多く、1983年の収穫期には10株当たり幼虫数がイネヨトウで約30頭、アワノメイガで約10頭であった。

これらのメイチュウ類による被害は、7月下旬から少しずつ出現し、9月中旬以降両種の中・老令幼虫の増加とともに急増した。収穫直前の被害株率、茎率は1982年が96および73%、1983年が90および50%にも達した。



第1図 イネヨトウ幼虫の発消生長 (上: 1982, 下: 1983, ○—○: 若令, ●—●: 中令, □—□: 老令)